論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（教育学）	氏名	平山　裕基
学位授与の要件	学位規則第４条第[1]・２項該当		

論　文　題　目

演奏者の“あがり”発現構造に関する実証的研究

論文審査担当者

主　　査　　教　授　　枝川　一也
審査委員　　教　授　　井上　　弥
審査委員　　教　授　　上田　　毅
審査委員　　教　授　　関矢　寛史（総合科学研究科）
審査委員　　准教授　　伊藤　　真

〔論文審査の要旨〕

本論文は，演奏者の経験する“あがり”の要因と要因間の関係性を捉えたうえで，実際の演奏場面を用いて，本番前における演奏者の思考や，演奏中の演奏結果とその背後に存在する演奏者の思考について検証することをとおして，演奏者の経験する“あがり”の発現構造を実証的に解明するものである。学生演奏者を対象に，自由記述による質問紙調査（調査１，２），統計的な質問紙調査による因子分析（調査３），それら相互の関連性を検証するための共分散構造分析（調査４），演奏者の思考解明に向けた再生刺激法およびSCATによる実証的検討（調査５）を段階的に行っている。

論文の構成は，序章と終章を含めて全７章である。序章では，本研究の背景，本研究の目的，本研究の構成について述べている。

第１章では，演奏者の経験する“あがり”現象について先行研究を概観し，プレッシャー下における心理面，生理面，行動面の変化とそれらの関連性，およびプレッシャー下におけるパフォーマンス低下の原因とその理論について検討している。また，それらを音楽の演奏という文脈でとらえ直している。

第２章では，演奏者の経験する“あがり”の特徴について，計量テキスト分析を用いて検討し，音楽の演奏においても“あがり”とパフォーマンスの関係性を捉える際に，心理面，生理面，行動面の関係性を捉えた検討が重要であることを再確認している。また，演奏者の“あがり”について ８つの原因帰属傾向（「自己のおかれている状況の認知」，「失敗恐怖」，「心理的不安傾向」，「認知的変化の経験」，「生理的症状の知覚」，「他者評価への意識」，「練習不足感覚」，「自信不足感覚」）を示す要因を抽出している。

第３章では，演奏者の心理面，生理面，行動面の変化について，探索的因子分析，共分散構造分析を用いて音楽の領域における“あがり”の発現構造を提示している。その発現構造は，「自己のおかれている状況の認知」が「認知機能・感情状態の変化」に影響し，「認知機能・感情状態の変化」や「身体感覚・運動制御の変化」が，演奏のパフォーマンス低下に直結する「演奏の混乱と悪循環」に影響し，さらに「身体感覚・運動制御の変化」は「認知機能・感情状態の変化」からの影響を受けながら「演奏の混乱と悪循環」に影響を

及ぼすモデルとして提示されている。

第４章では，演奏者の具体的な思考や，演奏前や演奏中などの演奏結果から読み取れる演奏者の背後に存在する思考の推移の実態について，再生刺激法とSCATを用いて検討し，第３章で提示した“あがり”の発現構造モデルが示す変化が実際の演奏者の経験する“あがり”場面でも生じていることを実証している。

第５章では，第４章までに明らかになったことを総合的に考察し，本論文で提示された“あがり”の発現構造が音楽領域に特有の“あがり”の発現機序モデルの一端をなすものであることが示されている。また，演奏者の“あがり”の発現構造に関連する要因をふまえた予防法および対処法が提案されている。

終章では，各章の概要をふまえたうえで，本研究の成果，学術的意義，教育的意義，今後の課題が述べられている。

本論文は，以下の４点から高く評価される。

第１に，従来スポーツ心理学の領域において質的・量的に取り組まれてきた“あがり”の研究を音楽領域に発展させたことである。このことによって，スポーツと音楽の両領域の“あがり”の共通性とそれぞれの特性から生じる差異性が浮かび上がった。スポーツと音楽演奏はともに運動を基盤とする行為であるがゆえ，その共通性はある程度認められるものであるが，感情や芸術的志向をもつ音楽に特有な要素から音楽演奏の“あがり”を捉えようとしたことは，今後の音楽領域の“あがり”研究の発展に寄与するものである。

第２に，量的手法と質的手法を組み合わせることによって，これまでの研究では明示されなかった演奏場面の“あがり”の実態を実証的に明らかにしたことである。特に，本研究では演奏者の演奏過程の思考にアプローチするために，従来多く扱われてきた実験環境下での調査ではなく，心理尺度を用いた質問紙調査による量的手法とインタビューによる質的手法を組み合わせている。このことは，“あがり”研究における新たな手法の提示につながったと評価できる。

第３に，音楽演奏における“あがり”を捉えるための基盤となる視点を提示したことである。これは，“あがり”の発現構造モデルとして示されているが，感情心理学やスポーツ心理学の知見とは一部異なるモデルであり，音楽領域に特有な点が反映されていると解釈できる。実際は演奏者によって“あがり”の発現状況は異なり，本研究で示されたモデルはそのような多様な演奏者の実態を評価する際の基点となりうる点で意義が高い。

第４に，特に初級・中級演奏者に対して“あがり”への対処に向けた教育的示唆を与えていることである。本研究ではプロの演奏家ではなく，学生演奏者を研究対象としている。換言すれば，熟達の途上にある音楽学習者の“あがり”の状況とその構造を捉えた研究であった。したがって，初級・中級レベルにある音楽学習者がよりよいパフォーマンスを発揮できるために，学習者本人がいかなる視点をもって学習に取り組むべきか，また指導者はどのような視点をもって指導にあたるべきか示唆に富み，教育現場に与える意義が認められる。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和３年　２月　９日